5歳児事例

5月19日（木）　「こっち（表）が家で，こっち（裏）がお城ってことにしたら」

幼児の姿	教師の思い・考え
A児，B児らが，テラスでままごとをするために，段ボールで昨日つくった箪笥，巧技台，積み木などを持ち寄り，家をつくり遊び始めた。この時期，天候が良いのでテラスや戸外で遊ぶようにしていた。そのため，ほし組とつき組の間，しかも靴箱の前に家をつくっていたので，家があるとわからずに家の中を通っていく幼児がいた。 A児　「もう，入ってこないでよ」 そう言われて何のことかわからない様子の幼児もいた。 A児　「先生，みんな入ってきて困る」 教師　「そうか…。何かいい方法ないかね」 A児，B児らは困った表情を浮かべた。 A児　「壁をつくって，入ってこれないようにしたらいいんじゃない」 B児　「でも，（壁にするもの）何もないよ」 A児　「段ボールは？」 そして二人は教師に大きな段ボールがほしいと言いに来たので渡した。そしてA児，B児は段ボールを開き，壁の上に屋根がついているように，角を切った。その様子を見ていたC児，Z児，D児，E児らが，手伝いたいと加わってきた。 B児　「お城みたいにしたらいいんじゃない」 C児　「これ（屋根にするために切った三角の段ボールの切れ端）つけたら，お城になる」 Z児　「いいねぇ。お城に見えるよ」 Z児はすぐにガムテープを持ってきて，三角の段ボールを貼った。 E児　「変じゃない？」 A児　「え～，普通の家がいい」 B児　「お城にしよう」 D児　「わかった！こっち（表）が家で，こっち（裏）がお城ってことにしたら」 A児　「え～」 D児　「（三角の部分）煙突ってことにしたら」 B児　「いいね」 C児　「おうちごっこする時はこっち（表）で，お姫様ごっこする時はこっち（裏）」	・自分達で，自分達に合う方法を考えてほしいと思い答えた。幼児がどのように考えていくのか様子を見守ることにした ・材料を自分達から要求してきたことを嬉しく思い，手元にある1番大きい段ボールを渡した。段ボールで犬小屋，机など自分達の遊びに必要なものをつくっている幼児が多かったので，数種類の段ボールを準備していた。また，幼児から要求があった場合など，必要に応じて援助できるようにそばで様子を見守っていた ・A児は，D児の言葉に，エッという表情を見せた。しかし，その後の幼児の話を聞いていた。そして，「煙突」という言葉を聞き，少し気持ちが変わったように感じた

B児，D児らはいいねというような表情でC児の話を聞いていた。A児は不機嫌そうな顔でちょっと考えた後，Z児がつけた三角の部分について「ちゃんとまっすぐにしないと」と言って，貼り直した。 B児　「ここ（屋根）に洗濯物とか干せるよ」 C児　「屋根に洗濯物干したら変じゃない？」 C児の言葉でA児の表情は和んだ。 A児　「屋根に干したら変だよ」「窓もつくって見えるのにしよう」 Z児　「やってあげる」 A児　「(やらなくて）いいよ。やるから」 「こっちがおうちだから，屋根は赤色。お城は水色にしよう」 C児　「いいね。色塗ろう」 そう言って，幼児は教師と共に絵の具を準備し，みんなで色を塗っていった。	・A児はZ児のやった行為に対しては，あまりいい思いをもっていなかったが，お城と家をつくることは受け入れたと感じた

≪　考察　≫

課題

①友達が入ってこない家をつくりたい

↓

②自分のイメージする壁をつくりたい

解決方法

①　教師に段ボールをもらい壁をつくって解決　思いの実現

②　お互いの思いを実現するために，話し合いの中で出てきた折衷案を見つけて解決

話し合い　折衷案

学んでいたと思われること

・どんな壁にするか，友達と話し合いながらそれぞれがつくりたい壁をつくることができたこと

思いの伝え合い　思いの実現

自分達がつくろうとする壁をどのようにするか，友達と話し合いながらそれぞれの思いが実現する方法を見つけ，つくりあげた場面

・段ボールの壁は両面を使うことができること　物の使い方の工夫

段ボールには裏と表があり，両面を使うことができ，ひとつの見方だけではなく，逆から見立てることができることに気がつき，裏と表で違うものにする場面

・自分達の思いを実現することができること　達成感　満足感

自分達の思いを実現するために，教師に段ボールをほしいと要求して手に入れ，壁をつくることができた場面

環境の構成

・幼児のつくりたいものをつくることができるように準備した段ボール　目的に応じた素材

これまで幼児は様々な場で，段ボールでつくったものを使い，遊んだり，生活したりしてきた経験があった。また，この時期の幼児にとって段ボールは，自分達で段ボールカッターなどを利用し自由に加工することができたため身近な素材となっていた。そのため，壁をつくる時には段ボールが有効であると感じ，自分達の思いを実現するには適した素材であると考え，教師に要求し，自分達で加工してつくっていく姿につながったと考える。

教師の援助

・必要に応じて援助できるように幼児が思いを伝え合っている様子をそばで見守る　見守る

最初はA児とB児の思いから始まった壁づくりであるが，教師がいることで周りの幼児がかかわってきた。そこで，A児とB児がどのようなかかわりをするのか，必要に応じで教師もかかわろうと思い，そばで様子を見守っていたことで，友達とかかわりながら最後までつくりあげ，達成感を味わうことができたと考える。

（文責：西多由貴江）

6月7日（火）　「固いから？」

幼児の姿	教師の思い・考え
F児，G児，H児らが，藤棚下でアスレチックコースをつくり始めた。F児は，昨日と同じように竹のトランポリンをつくろうと，半分に割られた約3メートルの竹をひきずり，運び始めた。 教師　「竹，一人で運ぶの危ないよ。誰か，手伝ってくれる人いないかな？」 F児は，しばらく考えた後「手伝って」と，藤棚下にいる友達に声をかけた。その声で，H児，G児が手伝い，竹を運び，ベンチの上に置くとすぐに，三人で竹の上でジャンプを始めた。しかし，竹が太く，割り方も浅かったため，しなりがほとんどなく，思ったように弾まなかった。	・長い竹なので，危険がないようにという思いと，F児が友達を頼れるようになってほしいという思いから声をかけた
H児　「なんか，弾まん」 F児　「これ（使っている竹），ダメや」 H児　「先生。なんか，これ弾まん」 教師　「なんでかね」 H児　「固いから？」 三人は顔を見合わせて首をかしげた。 G児　「これ昨日の（竹）と違うんじゃない」 F児は別の竹を運ぼうと竹置き場に走っていった。その後をH児，G児も追いかけた。 H児　「（薄く割られた竹を持ち上げ）これじゃない？」 二人は，竹がしなるか確かめていた。 G児　「ここ割れてなかったよ」 F児は別の竹を持ち上げ，竹がしなることを確かめて「これは？」と言った。 H児　「これかも」 そう言ってその竹を運んできて，最初に置いてあった竹の隣に並べて設置すると，すぐにF児がジャンプを始めた。 F児　「できた！」 H児　「やっぱり」 G児　「こっち（今もって来た）の方が，小さい（低い）」 教師　「どこが小さかったの？」	・自分達で考えたり，試したりしながら完成させてほしいと思った <竹の断面図> 高い　低い ・2本の竹の違いに気づき，竹を選ぶ視点が明確になればいいと思い声をかけた

G児　「(竹の高さを手で示しながら) ここ。こっちの方が小さい (低い)」 H児　「そうや」 教師　「へぇ～，竹の大きさが違うんだ」 G児　「こっちは，大きいから (高い) だめ。こっちは小さい (低い) から，弾みやすい」 H児　「もう１個つくるか」 そういって，H児とG児はもう１本，薄く割られた竹を運びトランポリンをつくった。	・幼児の気づきに共感したいと思った。竹の大きさと表現したが，それでよかったか悩んだ

≪　考察　≫

課題

・竹トランポリンをつくりたい

解決方法

・友達と試しながら竹を選び解決　試行錯誤

学んでいたと思われること

・手伝ってほしい時には自分から声をかけると手伝ってくれる友達がいること (F児)
協力するよさ

竹トランポリンをつくりたい思いをもち，自分から友達に声をかけ，手伝ってもらう場面

・同じ竹でも太さや割り方によって弾んだり弾まなかったりするものがあること　ものの性質
試行錯誤

同じ竹でも，太さや割り方によって，しなり方が異なることがわかり，自分達で試しながら，竹トランポリンをつくることができた場面

・自分達で竹を選びつくることができた満足感　満足感　自信
もう１本，竹トランポリンをつくろうと自分達で竹を選びつくりあげた場面

環境の構成

・一人では運べない長さ，様々な太さの竹　一人では扱うことができない素材
選択できる数と種類

竹は，昨年の夏にパパーズ (父親サークル) が親子で流しそうめんをするために，角間の里山から切り出し，半分に割り節をとったものである。長さも３メートルあり，重さ的には一人で運べない重さではないが，長さがあるため，なかなか思うように運んだり設置したりすることができないものである。そのため，友達に助けを求めて一緒に運ぶ姿につながると共に，自分達で試しながら，目的にあうものを選ぶ姿につながったと考える。

教師の援助

・自分達で目的に合った竹を選ぶことができるように投げかけ，選ぶ視点を考えさせる

焦点化する

幼児が昨日楽しんだ竹トランポリンを自分達でつくることができるように，竹を選ぶ視点に気がついてほしいと願い声をかけた。そのことがきっかけとなり幼児はどの竹を選んだらうまくいくかを考え始めた。

・幼児の気づきや自分達で完成させた満足感を認める　気づきを認める

幼児が試行錯誤しながら，竹の違いに気がつき，自分達で竹トランポリンを完成させることができた満足感を認めることで，もう１本，別の竹トランポリンをつくることにつながった。

（文責：西多由貴江）

６月２１日（火）　「先生，牛乳取りに行くのって今日だけ？」

宿泊体験にむけて学年２クラス混合のグループで生活をすることになった。これまで教師が決めたグループごとに牛乳を取りに行くことは経験していた。しかし，他クラスとの混合グループで生活をすることは初めてである。そこで今後２週間，このグループで生活や活動をすることを伝え，見通しがもてるように宿泊体験までの月カレンダーを掲示していた。

つきＬ児は，クラスの中でも何事も自分がしたいと真っ先に動き出す幼児である。また，やりたかったことを友達がすることになるといじけてしまうこともよくあった。

幼児の姿	教師の思い・考え
ほしＩ児，Ｊ児，Ｋ児，つきＭ児，Ｌ児，Ｏ児，Ｎ児は，宿泊体験の同じグループになり，したい遊び後にはじめてのグループ活動をすることになった。Ｌ児，Ｋ児，Ｊ児が着替えをし，プレイルームのカーペットに集まり遊びながら友達を待った。その後Ｏ児，Ｍ児，Ｎ児がカーペットに集まり座った。	・したい遊びで泥遊びをしていた子が着替えに時間がかかっていたが，多くの子が集まっていたので，牛乳を取りに行くように声をかけた
教師　「今日からグループで牛乳を飲みます。誰が取りに行くか決めましょう」 Ｌ児，Ｋ児，Ｊ児は口々に自分が行くと言い合いになった。 Ｏ児　「誰，行くの？もう他のグループ，取りに行ってる」 Ｌ児　「じゃあ，行って来る！」 Ｋ児　「なんでＬ児が行くん！？」	・他クラスの友達と構成された新しいグループでどのように決めるのか見てみたいと思った
他のグループが次々に牛乳を取りに行く中，取りに行く人が決まらず焦り，Ｌ児，Ｋ児，Ｊ児は立ってうろうろし始める。そこにＩ児が遅れてやって来て，牛乳を取りに行く人を決めていることを知り，「わたし，持って来る」と走って行った。 Ｋ児　「なんで，Ｉ児ちゃんが行くん？！」 Ｊ児　「ずるい！」 Ｉ児，Ｋ児，Ｊ児は追いかけていって引っ張り合いながら，自分が行くと言い争いになった。Ｌ児は立ったまま，その様子を見ていた。	・大きな声で話したり，立ち歩いたりするが，話題は反れていないので，そばで見守った ・他グループの様子に気づかず引っ張り合いになっているが，Ｌ児が何か考えているように思えたので，声をかけた
教師　「あと，緑グループだけだよ。どうするん？」 他のグループの中には牛乳を飲み終わっているグループがあることに気づき，さらに焦り， Ｉ児　「早く行かんなん！」 Ｊ児　「最後になったーー！」	

L児　「先生，牛乳取りに行くのって今日だけ？」 教師　「ううん。今日だけじゃないよ」 L児は，I児，K児，J児の方を見て， L児　「今日だけじゃないって。俺，今度でいいわ」 と言ってからカーペットに座った。L児が座った様子を見て，I児，K児，J児がカーペットに戻ってきて，座った。 I児　「じゃあ，三人でジャンケンして決めよう」 K児・J児　「わかった」 L児の合図でジャンケンをしてI児が勝ち，牛乳を取りに行った。残ったメンバーで，明日からの話をし始めた。	・L児の質問で今後のことを考えていることが分かったので，そのまま話し合いをするのを見守った
L児　「K児とJ児でジャンケンして明日とあさってする人決めんか。俺，いつでもいいわ。先生，まだ何回もあるんでしょ？」 教師　「しばらくグループだよ」 L児　「こっちはこっちで決めて」 とM児，O児，N児にジャンケンをするように声をかける。 教師　「L児さんはジャンケンしないの？」 L児　「うん。だって誰かが（牛乳を取りに行くことを）すればいいんでしょ」	・L児が何度も同じような質問をしてくることから，何回あるのか見通しをもちたがっている様子がわかり，安心させたかった
教師　「譲ってあげられてすごいね。L児さんのおかげで牛乳の順番，決まりそうやね。よかったね」 その場にいた人がL児に向かって「ありがとう」と言うと，L児は，はにかんだ様子で，黙ってうつむいていた。	・L児が譲る経験をしたことを褒め，そのことを広めたいと思った

≪　考察　≫

課題

・グループで牛乳を取りに行く人を決めなければいけない

解決方法

・見通しをもつことで，順番を決めるとよいことに気づき解決　見通し　既知の知識の活用

学んでいたと思われること

・自分の思いを主張しすぎていても決まらないこと（L児）　気づき　葛藤　内省

自分が行くと言い争いになったが，他のグループの中には牛乳を飲み終えているグループがあることに気づいた場面

・グループのみんなが関係していることを忘れないこと（L児）　グループ意識

牛乳を取りに行きたいと主張している友達だけでなく，見ていた友達にもジャンケンをするように声をかけた場面

環境の構成

・他のクラスの友達と構成されたグループ　意図的なグループ編成

活動を他クラスの友達と行うことはあっても，生活も活動も行うことは，初めての経験であった。クラスごとの異なるやり方や経験があるので，一緒に生活をするうえでそれぞれの思いや考えを伝える必要が生じやすい場である。また，これまでと異なる人間関係になり，友達の様子を見ながら考え，共に行動していく必要も生じやすいと考える。

・他のグループの様子が見える空間　見通しのよい場

プレイルームにカーペットを敷き，周りに幼児の椅子を置くことでグループの部屋を意識できるようにすると共に他のグループの活動の様子が見えることで，自他を意識したり解決の手助けとしたりすることができたと考える。

教師の援助

・見通しをもたせる　見通しをもたせる　意欲をもたせる　安心できるようにする

１日の見通しだけでなく，もっと長い期間の見通しがもてるように部屋に月カレンダーを掲示した。また，前日にクラスで，当日までこのグループで活動することを伝え，このグループでの生活が続くことを知らせた。

・周りの様子に気づかせる発言　周りの様子に気づかせる

自分の思いを通そうと四人の言い争いになり，グループとしての意見をまとめることが難しかった。三人の幼児は，言い争いには入らずその様子を見ていた。しかし，言い争っていたL児に考えている様子が見られ，周りの様子に気づいていない幼児が三人になったので，冷静になれるよい機会と考え，周りに目が向くように声をかけた。

（文責：和田　紀子）

１０月１３日（木）　「みんなつかっていいよ」

幼児の姿	教師の思い・考え
C児，P児，Q児はテラスで藁のリースづくりをしていた。 C児　「何飾ろうかな・・・。そうだ！」 そういって，C児が昨日里山から持ち帰ってきて保育室に飾っていた花や実などを持ってきて，「これ飾りにするわ。みんな，使っていいよ」「この花はかわいいよ」と，藁に飾り始めた。 P児　「これ（C児のもってきた花）使ってもいい？」 C児　「いいよ。いっぱいあるし」 P児はC児の持ってきた花をとり，飾っていった。 Q児　「先生，これ（教師が飾りにしようとしていた赤色の花）使ってもいい」 教師　「これは，使おうと思ってるからな・・・・」 C児　「C児の使っていいよ」 Q児　「・・・・・・」 C児　「いっぱいあるから」 Q児　「・・・（C児が使っている）赤い花がほしい」 C児が持ってきた花の中に１つ赤い花があったが，C児が使っていたため，赤い花は残っていなかった。 C児　「そうなん」 Q児　「・・・・・・」 C児は「わかった！」と園庭に出て行き，ベゴニアの花をとって戻ってきた。そしてQ児に「はい。使っていいよ」と赤いベゴニアを差し出した。 P児　「私も集めてきたい」 C児　「こっちにいっぱいあるよ」 P児とC児は二人で園庭に出かけ，草や花を数種類集めて帰ってきた。その間Q児は，C児にもらったベゴニアを飾った。 C児　「こんな，たくさんあったわ」 教師　「いろいろな種類（の草花）見つけられたね。素敵なリースになりそう」 C児　「うん」 Q児　「・・・・・私も行きたい」 C児　「集めに行きたいの？」 Q児は頷いた。	・里山活動と園での生活がつながってほしいと考え，保育室に藁でつくったリースに草花を飾ったものを提示しておいた。また，テラスに里山から持ち帰ってきた藁とわずかな花や実を提示しておいた。また，テラスで行うことで園庭の自然物に目を向けることができると考え，場を設置した ・C児の思いを大切にしたい，Q児が他の幼児とかかわり合ってほしいと思い，すぐにQ児に渡すことをしなかった ・園庭にもいろいろな種類の草花が生息していることに気づいてほしいと思い，種類という言葉を使い，二人の発見に賛同した

C児　「わかった。こっちにあるよ」 Q児はC児と一緒に園庭に行った。 C児　「ここに，（ベゴニアの赤い）花があるよ」 Q児　「・・・・さっきの小さい花はどこにあるの？」 C児　「小さいの？・・・あの，白いの？」 Q児　「うん」 C児　「それなら，こっちにあったよ」 Q児も自分で自分の気に入った花を集め，笑顔で戻ってきた。C児は「いっぱいあったね」とQ児に声をかけた。Q児は笑顔で答えた。そして，三人で集めてきた草花をみんなの真ん中に置き，リースに飾っていった。幼児は出来上がると喜び，友達や教師に見せた。	

≪　考察　≫

課題

- **困っているQ児を助けたい（C児）**
- **自分の気に入った草花を飾ったリースにしたい（Q児）**

解決方法

- **Q児の気持ちを汲み取り，状況に応じて自分の考えを伝えて解決（C児）**
- **友達の思いに応じて一緒に行動することで解決（C児）**
- **友達に助けてもらい，自分の気に入った飾りを手に入れて飾ることで解決（Q児）**

学んでいたと思われること

・相手の状況や思いに応じて行動すること（C児）　思いやり

Q児の思いを知り，Q児の状況に応じて声のかけ方，かかわり方を考え，友達の思いに合わせながら，行動していく場面

・困っている友達を助けられたこと（C児）　自己有用感

Q児が自分の持ってきた花を使ってくれたことや自分を頼りにしてくれた場面

・助けてくれる友達がいること（Q児）　友達理解

自分の困っている状況を汲み取ってC児が花を持ってきてくれたり，一緒に探してくれたりした場面

・必要に応じて自由に園庭の自然物を活用すること　自然物の活用

自分達で園庭の自然物を集め，リースの飾りに使った場面

環境の構成

・教師のようなリースをみんなでつくるには十分ではない数や種類の飾り用の自然物

モデル　不十分な種類と数

自分達で必要な自然物を探しに行くことを願い，教師が飾りつけしたリースを提示し，幼児がリースの飾りつけをするには十分ではない数と種類の草花を準備していたことで，幼児がかかわり合い，自分達で自然物を探しに行く姿につながったと考える。

・園庭が見える場での環境設定　場の設定

テラスに場を設定することで，幼児が落ち着いてリースづくりに取り組むことができると共に，必要に応じて，すぐに園庭に自然物を集めに行き，自分達のリースづくりに利用することができたと考える。

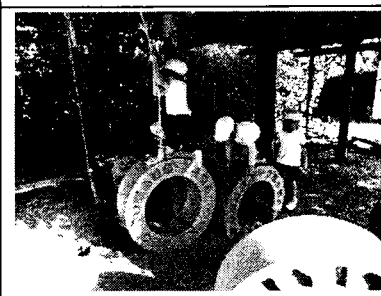
教師の援助

・友達のしていることを気づかせる　友達とのつながりを促す

困っているQ児が友達とかかわり合う姿を願い，あえてQ児に手を貸したり，教えたりしなかったことで，C児がQ児に声をかけて一緒に草花を探す姿につながっていったと考える。

（文責：西多由貴江）

１０月２７日（木）　「コツ分かった…かもしれん」

幼児の姿	教師の思い・考え
R児，S児は藤棚下のロープを使い，サーカスごっこをしていた。R児は，前日までU児，T児らがロープを持ちながら転がるドーナツ型の構成遊具の上を歩き，前進していく遊びを思い出し，繰り返し挑戦していた。R児が少しずつできるようになってきたところにC児が来て，挑戦することになった。R児に支えられながらC児が挑戦するが，遊具が転がっていってしまうことが怖くなり遊具の上で動けなくなってしまった。 R児　「すべる？すべっていいよ」 と言って，遊具の横に移動し，C児をすべり下りさせる。 C児　「怖いよぉ」 R児　「最初，怖いよね」	 ・C児の気持ちに寄り添い声をかけていたR児が，動けなくなったC児に気づいていたので，直接かかわらず見守った
R児とS児は次に乗ろうとするが，C児は虫かごと網を取りに行き，少し離れる。 教師　「R児ちゃん，やる？コツがあるのかな」 R児　「あるよ」 R児はロープを持って遊具の上を歩き，C児はそばを歩きながらR児の動きを見ている。R児が下りた後，S児がしようと来た時にC児も一緒に近寄ってくる。	・C児が諦めそうになっていたので，できるようになってきたR児が遊びはじめる様子を見てほしいと思い，少し大きな声で伝えた
S児　「次，S児やる」 C児は近くのロープで遊びながら，S児の様子をちらちら見ていた。S児が遊具の上で後傾になった様子を見て 教師　「おぉ，S児ちゃん，バックバック！」 C児　「バック！バック！」 R児　「歩いて！歩いて！」 と行ったり来たりしているS児の様子を見ながら応援する。S児が下りた後， C児　「C児，もう１回する」 R児　「次，R児やってからね。コツ分かった？見とって」 C児　「う～ん，コツ分かった…かもしれん」 R児　「じゃあ，今R児やる時，コツ教えてあげる。見とって！」	・S児が後傾の体勢から戻す時の様子を，C児に見てほしいと思い，少し大きな声で伝えた

R児が遊具に乗ろうとした時，C児は遊具が転がるのを両手で支えながら，上に乗っているR児の手や足の様子を見ていた。 教師　「R児ちゃん，コツは何？」 R児　「コツは，乗る時さー」 C児は手を離し，R児と同じようにズックを脱ぐ。R児はC児の様子を見て遊具から下り，C児が乗れるように遊具を支える。 R児　「乗る時に，押さえてもらった時にここ乗って…ここ持って，丸のところ。それで，ロープを持つ」 と遊具の横に立ち，C児の動きに合わせて指で示しながら教える。C児はR児の言葉に合わせて動き，遊具に乗る。 R児　「歩く！歩く，歩く！」 C児は，ロープを持つ手に力を入れ引き寄せたまま，後ろに体重をかけ遊具を引き寄せるように歩く。 R児・S児　「わぁーーー！」 R児とS児は手をたたきながら喜び，C児が下りられるように遊具を押さえ，C児が下りる。 教師　「やったー！」 C児　「めっちゃ楽しかった！」 教師　「R児ちゃんとS児ちゃんもよかったね」	・R児は，コツを見つけようとR児の様子を見ているC児に気づいていないようだったので，コツを話すように促した ・できた嬉しさ，友達のことを思っての頑張りを共有したいと思い，声をかけた

≪　考察　≫

課題

- **遊具に乗って友達みたいに歩きたいけど，怖いのでどうするとよいかわからない（C児）**
- **自分ができるようになったことを，友達に教えてあげたい（R児）**

解決方法

- **友達に教えてもらいながら，友達の様子を真似し，自分で挑戦することで解決**

教えてもらう　**真似る**　**挑戦する**

学んでいたと思われること

- 諦めないで取り組むよさ（C児）　諦めない

C児が友達の遊んでいる姿を見て自分も遊具に乗れると思ったが，予想より後傾になることが怖くてできなかった時に，その場を離れず友達の動きを見ていた場面

・友達の動きや様子を見ながら取り組むこと（C児，R児，S児）

気づき　思考　ものの特性　他者理解

C児がR児の動きを見ながら遊具に乗るコツを見つけようとしたり，R児やS児がC児の動きに合わせて乗るコツを教えたりした場面

・コツをつかむこと（C児）　試行

コツをつかむために瞬時に考えながら，体を動かしている場面

・できるようになった達成感（C児，R児）　達成感

C児が遊具に乗って，初めて歩いて行ったり来たりできた場面

R児とS児がお手本をしたり教えたりしたことで友達ができるようになった場面

環境の構成

・楽しそうに挑戦している友達の存在　モデルとしての友達

R児とS児は，これまで他の友達が楽しんで遊んでいる姿を見ていた。R児は何度か挑戦し遊具の上で行ったり来たりでき，楽しさを知っていた。S児はこれまで友達の様子を見てきたことで初めての挑戦でも楽しむことができた。楽しさを知っている友達がいることで，C児も挑戦したいと思うことができたと考える。

・自由に組み合わせて遊べる場　自由に組み合わせられる遊具

藤棚下にぶら下がることのできる固定したロープとドーナツ型の構成遊具を置く。これまでは別々に使って遊んでいたが，２つの遊具を組み合わせて遊ぶことを楽しむようになった。

教師の援助

・幼児の遊びを見守る教師の存在　見取る　見守る　安心感

足元の遊具が動く不安定さに興味はあるが，少し怖がっている姿が見られた。しかし，幼児のこれまでの動き方を見て，ちょっと頑張ると楽しんでできる遊びだと考えた。教師がそばにいることで，幼児にとって安心して遊ぶことができたため，諦めずに取り組むことができたと考える。

・幼児同士のつながりをつくる　仲介する

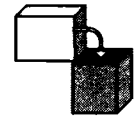
できるようになりたいと夢中になって遊んでいる幼児に，互いの思いや様子に気づくことができるよう声をかけた。また，遊具の動きと幼児の動きの関連性に気づくことができるようにした。

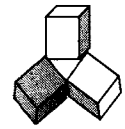
・R児がC児にコツを教えられるように気づかせる　焦点化する

C児が乗ることができるようにするために，R児が落ちないで行ったり来たりして遊ぶためにどうするとよいかをC児に教えていることに気づかせるようにした。

（文責：和田　紀子）

１１月９日（水）　「ここに斜めに置いて，もう１個こっちに置けば？！」

幼児の姿	教師の思い・考え
特別支援学校に行き，段ボール迷路で遊んだことから，「園でもつくりたい」という思いをもち，U児，X児，N児，Y児，M児が段ボール迷路を保育室でつくり始めた。	・つなぎ方を考え自由に使ってほしいと思い，さまざまな大きさの段ボールを準備し置いた
N児　「長くなってきたね」 真っ直ぐのトンネルや横面に穴を開けＴ字状につなげて，つくっている迷路を見ながら， 教師　「どんな迷路にしたいん？」 U児　「もっとおもしろいのにしたい！」 教師　「おもしろいって，どんなの？」 U児　「分かれ道あるやつ！」 X児　「行き止まりもあったよ」 N児　「じゃあ，ここ（横）に穴を開けて…」 M児　「穴あけるの，すっごい大変だから，やだ！」 Y児　「それに，穴あけたところ，つぶれやすいし…」 U児　「じゃあ，ここ（あけた穴の横）にティッシュの箱をくっつければいい」 M児　「(ティッシュの箱は）もうないし！」 Y児　「中を通っているお客さん，狭くて通れんかったよ。上から天井も落ちてくるし」	・真っ直ぐか，穴を開けるかの２通りでつなげてあるトンネル状のものだったので，どうすると迷路らしくなるのか考えられるように尋ねた
教師　「じゃあ，どうするん？」 U児　「頑丈な分かれ道，つくるしかない」 U児，X児，M児，Y児は迷路を見ながら，しばらく考えているようだった。 N児　「じゃあ，横に置いてくっつけたら？」 と段ボールの角を合わせ，直角になるように置いた。 U児　「それ，つながってないし。外に出てしまうよ」 と言うと，N児が動きを止め段ボールから離れた。 教師　「でも，１回置いてみて，どんな置き方すれば分かれ道になりそうか考えてみてもいいんじゃない？」 U児　「ふ～ん，わかった」 U児，Y児，X児，N児は置く位置，段ボールの大きさや向き，数を変えながら，何度も置き直していた。	・前日に苦労して穴を開けたM児や迷路の天井が落ちやすいことに気づいたY児の意見を含めたつなげ方が考えられるようにしたかった  ←N児の考え ・置き方を工夫するとよいことに気づいたN児の考えを試してみてもよいと思い，すぐにつなげず置いてみるという方法を提案した

U児　「わかった！ここに斜めに置いて，もう１個こっちに置けば？！」 教師　「はぁ～ん，こうか？」 とU児がなんとなく置いた段ボールをくっつけて置き，きょとんとしているN児，X児，M児，Y児に見せた。 U児　「うん，そうそう！三角にくっつけるん」 X児　「いいね！」 N児　「このまんまくっつけたら分かれ道にできるんじゃない？」 U児とX児が段ボールを支え， M児　「わたし，中に入ってくっつける！」 N児　「ぼくも！」 Y児　「Y児，横くっつけるね」 教師　「じゃあ，先生，Y児ちゃんと一緒にするわ」 とM児，N児，Y児，教師が内と外からガムテープで留めた。 U児　「頑丈かどうか，通って確かめるわ！」 とU児を先頭にみんなが中に入った。 教師　「(U児に向かって) どうやった？」 U児　「大丈夫やった！ちゃんと分かれ道になってる！もっとおもしろいのにしようぜ！」 と五人で手分けして，続きをつくり始めた。	 ←U児の考え ・U児が離れた位置に置いたので伝わりにくいと思い，そばに寄せるとともに，中央にできた三角形に注目しやすいようにした ・五人で役割を分担してつくっていたので，Y児の手伝いをしようと思い，ガムテープで留めた ・アイディアを出したU児に考えことがうまくいったことを感じてほしくて尋ねた

≪　考察　≫

課題

・段ボール迷路の分かれ道をつくりたい

解決方法

・友達と一緒に物を操作しながら，何度も試すことで解決　試行錯誤　目的の共有

学んでいたと思われること

・友達と思いや考えを出し合い，共有するよさ　考えや思いの共有
どんな迷路にしたいか，そのために何をどのようにつくるのがよいかを話し合う場面

・試しながら目的に合った方法を考えること　試行錯誤
すぐに段ボールをくっつけずに，大きさや置き方を変えながら置く場面

・自分達で手分けしてつくるよさ　役割分担

三角形になるように置いた段ボールをつなげる場面

環境の構成

・さまざまな大きさの段ボール　可塑性　組み合わせ

子どもにとって，切ったり穴を開けたりするのに扱いやすい大きさや形であり，試しながら組み合わせることができると考えた。

・遊びに使える保育室の広さ　限られたスペース

保育室は遊びの場でも生活の場でもある。生活の場が狭くなりすぎないように考えながら，段ボールをどのようにつなげると面白い迷路をつくることができるか工夫することにつながったと考える。

教師の援助

・つくりたい迷路の思いやつくった時の思い，経験を共有できるように声をかける

思いや考えを共有させる

個々が自由につなげ楽しんでいたため，つなげ方の工夫や苦労は個々のものであった。同じ遊びをする仲間で共有してほしいと願い，声をかけた。それぞれの思いや経験が共有でき，一緒に考え，つくることにつながった。

・幼児が考えたことが伝わりやすいようにする　代弁する

アイディアが思いついたがうまく言葉や動きで表現できなくても，様々な方法で伝えてほしいと願い，教師が伝わりやすい言い表し方や置き方に変えて提示し直した。U児は，教師が段ボールを動かした時に自分の伝えたかった置き方になったので，自分の考えた置き方がみんなに伝わったと思い，段ボールを支える側になり，みんなも手分けしてつくろうという思いになったと考えた。

・遊びの一員になり，幼児と一緒に段ボール迷路をつくる　遊びの一員となる

教師も一緒に段ボール迷路をつくることで，今まで近くにいる友達と何となくつくっていた遊びが，友達と一緒につくる遊びへと変わっていったように思われる。

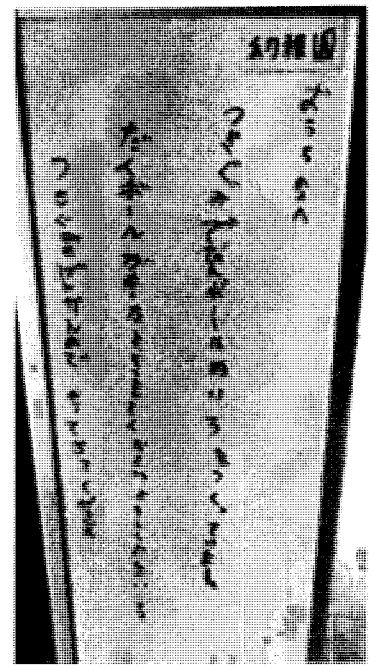
（文責：和田　紀子）

１１月９日（水）段ボール集め①　「ｂ児ちゃんは『おうちのひとへ』って書いて。次に，『段ボール持ってきてください』って書かんなん」

幼児の姿	教師の思い・考え
a児，ｂ児，M児，D児らは，段ボールを使って保育室内に迷路をつくっていた。ガムテープでつなぎ合わせ，分かれ道や行き止まりをつくっていた。保育室内にある段ボールを使っていたが少なくなり，どうやって集めようか話し合った。お家の人に持ってきてほしいことを伝えようと自分達でホワイトボードに書くことにした。 教師　「誰，書くの？」 ｂ児　「わたし書く！」 D児　「わたしも書きたい！」 ｂ児は教師から黒マーカーを取りあげ，ホワイトボード前に陣取り，書き始める。D児，M児，a児はその周りに集まる。 D児　「次，わたしね」 M児　「なんでD児ちゃんなの？」 a児　「順番に書いていけばいいんじゃない」 D児　「どんな順番？」 ｂ児　「なんて書く？」 a児　「ｂ児ちゃんは『おうちのひとへ』って書いて。次に，『段ボール持ってきてください』って書かんなん」 M児　「誰書く？」 D児　「わたし，もういい！」 a児　「じゃあ，わたし書く」 と四人で書き始めた。しかし，初めてホワイトボードに書くので，文が曲がったり，書いた文字に手が触れて消えてしまったり，文字がわからなかったり等で困ったが，友達と考えたり教師に助けを求めたりしながら自分達の思いを書いた。 教師　「あと，何書くの？」 M児　「わたしが，『よろしくおねがいします』って書く。それで終わり」 教師　「それだけじゃわかりにくいよ。なんで持ってきてほしいの？」	・自分達でお家の人に書いてお願いすると決めたことと，文字に興味がある幼児が多かったので，協力して自分達で書けると判断し，教師が書かないことを伝えた ・自分達で考えてほしいと思い，見守った ・理由や持ってきてもらう場所等，何を伝えなければいけないか明確になるように尋ねた

a児　「段ボール迷路つくるし」 教師　「じゃあ，そのこと書かないと，お家の人はどんな大きさの段ボールを持ってくればいいのかわからないよ」 D児　「本当や！まだ書かんなんことあるかもしれん」 教師　「そうやね。例えば，お家の人が持ってきます。それからどうするん？」 D児　「玄関まで持ってきてって書かんなん。わたし書く！」 a児　「じゃあ，どんな順番で書く？」 M児　「最初に『段ボール迷路をつくっています』って書くね」 a児　「次，わたし書く」 D児　「じゃあ，最後に書く」 書く順番と内容を決め，落ち着いた雰囲気で文を書き始めた。時々，曲がってないか，次に書く文字は何かを確認したり声をかけたりして交代しながら書いた。 a児　「先生，書けたよ！」 教師　「おぉ！できた？『おうちの人へ　つきぐみでだんボールめいろをつくっています。だんボールがあったら，もってきてください。よろしくおねがいします。つきぐみのげんかんまでもってきてください。』なんで，ここに『よろしくお願いします』なん？」 D児　「だって，書く場所がなかったんだもん」 と口を尖らせながら言った。 教師　「じゃあ，書かなきゃいけないから，どこに書こうか考えて書いたんだね。わかったよ。いいのに，書けたね！早くお家の人が見える所に置いておいで！」 四人は，「よし！行こう！」と嬉しそうにホワイトボードをテラスへ運んでいった。 翌日，つき組の玄関に届いた段ボールを見て，「やったー！段ボール持ってきてくれた！」と喜んでいた。	・最後まで書いた文章を声に出して読み，自分達の書いた文章を確認してほしかった ・文章を書くために自分達なりに工夫したこと，最後まで書き上げたことを褒め，置くところまで自分達でやりきってほしいと思った

≪　考察　≫



課題

・段ボール迷路をつくるための段ボールがほしいことを伝えたい

解決方法

・ホワイトボードに保護者へのお願いを書き，持ってきてもらうことで解決　**文字で思いを伝える**

学んでいたと思われること

・ホワイトボードに思いを書くための文の内容や言葉遣い

既知の知識の活用　相手意識

ホワイトボードに書く文を考えたり書いたりしている場面

・多くの人に思いを伝えるためには，文字を使うと便利だということ　文字の役割　満足感

翌日，玄関に段ボールがたくさん届いた場面

環境の構成

・ホワイトボードを使ってお知らせをしているやり取りを見ることができる状況

文字の役割に気づく

これまで登降園時に保護者や教師がホワイトボードを使って，多くの人に思いを伝えたり伝わったりしていることを見て知っていた。そのため，自分達の思いを保護者に伝えるためには，ホワイトボードが有効であると経験から感じとることができたと考える。

教師の援助

・ホワイトボードに教師が書かない　見取る

文字に興味関心のある幼児が多かったので，自分達で書けると思い，教師が書くと言わなかった。日頃から保護者に伝えるために利用しているホワイトボードを使用することが効果的だと考え提案した。自分達の思いを自分達で書き，伝える経験ができると考えた。

・相手のことを考えた文になるように声をかける

相手意識をもたせる　表現の仕方を考えさせる

自分達の思いを書くことで満足するのではなく，思いを伝えたい相手がいることやお願いをしていることまで意識してほしいと考えた。読んだ相手が困らないようにするには，何を書くとよいのか助言することで，どのように書くとよいか考えることができると思った。

（文責：和田　紀子）

１年生との交流活動

小学校１年２組と連携し，年間を通して交流活動を計画して活動を積み重ねてきた。１学期は交流グループを設定し，活動する時には同じメンバーで活動してきた。主な活動は弁当交流，遊び交流，プール遊びである。２学期に入り，交流グループごとに自分達が乗ることができる船づくりを行い，実際にプールに浮かべて楽しんだ。

この事例は，11月初旬から１年生と一緒に店をつくって楽しもうと活動してきた中での姿である。『あきいっぱいまつり』と名付け，自分達でつくって遊ぶことができる店を考え，一人一人が自分のやりたい店を選び，同じ店に興味をもった児童，幼児が集まり活動してきた。その店の中の１つに，ｇ児，W児，Ｓ児，ｑ児，ｄ児，Ｖ児，ｅ児の幼児だけの『おちばぶろやさん』がある。この店は落ち葉の中に自分達がつくった水の中の生き物を隠して，お客さんに探してもらうという店である。

１１月１４日（月）　「もう１回」

幼児の姿	教師の思い・考え
Ｖ児は店の看板をつくろうと画用紙を持ってきて，『おちばぶろやさん』と書こうとした。W児も看板をつくりたいと思っていたため，Ｖ児のそばにいた。Ｖ児が文字を書いていくが『ぶ』の字を思うように書くことができず「あっ！」「難しい」と言いながら，書きかけた部分をマジックで塗りつぶし，教師の顔を見た。 W児　「ぼく，書こうか」 Ｖ児　「ダメ。俺が書くの！」（怒ったような口調で言う） W児　「わかったよ・・・。大きな字で書いてよ」 Ｖ児　「わかってるって」	・幼児だけの店ではあるが，自分達で考えを出し合いながら店を完成させてほしいと思いながらそばで様子を見ていた ・Ｖ児は教師に助けてほしいと思ったと感じたが，隣にW児がいたので二人でやってほしいと思い，そのまま様子を見ていた ・Ｖ児が怒ったような口調で話したが，W児はそばを離れなかったことから，W児も看板を書きたいと思っていることを確信した
W児は教師の顔をちらっと見た後，Ｖ児の方に目を向けた。Ｖ児は『ぶ』の字が書けず止まっていた。W児は「『ぶ』はね，『ふ』に点々だよ。こうやって書くの」と，Ｖ児に見えるように画用紙の上に指で書いて見せた。Ｖ児はそれをじっと見ていたが，わからなかったようで，「もう１回（書いて）」とW児に頼んだ。W児はＶ児の隣に座り，もう一度書いて見せた。 Ｖ児　「難しいね」 W児　「まず，こうやって斜めに書くでしょ」 Ｖ児　「・・・・。『ぶ』書いて」 W児　「わかった」	・W児はＶ児に教えてあげたいと思っていることがわかった

W児が『ぶ』の字を書き終えると，V児は「おー！」っとW児の顔を見た。W児はV児にマジックを渡した。V児はマジックを受け取り『ろ』を書いた。そしてW児にマジックを渡し『や』を書いた。その後，V児が『さ』，W児が『ん』を書いた。 W児　「太くしないと」 V児　「どうやって」 W児は「こうやって」と言いながら，マジックで文字を太くした。V児は「いいね」と新たにマジックを取り出した。二人で字を太くし『おちばぶろやさん』と書いた看板ができあがった。	

≪　考察　≫

課題

- **看板をつくりたい（V児，W児）**
- **『ぶ』を書きたい（V児）**
- **V児に教えてあげたい（W児）**
- **文字を太くしたい（W児）**

解決方法

- **二人で協力して看板をつくる（V児，W児）**　協力する
- **W児に書いてもらって解決する（V児）**　手伝ってもらう
- **自分から声をかけ，自分が書くことを提案したり，V児がわかるように教えたりする（W児）**
  友達の状況を察する　言葉で表す　教える
- **自分の考えを言葉で伝え，実際にやって見せて同意を得て一緒に書くことで解決する（V児，W児）**　やり方を示す

学んでいたと思われること

- 同じ目的に向かって二人で協力してつくるよさ　満足感
  二人で一緒に看板の文字を書き終えることができた場面

- 自分の店を文字で表現すること　文字への興味
  看板に『おちばぶろやさん』と，文字で表現する場面

- 友達を頼ると助けてくれること（V児）　言葉で表現する
  「書いて」「どうやって」と自分から助けを求める場面

・友達の思いを察して，声をかけること（W児）　思いを察する　言葉で表現する
V児の様子から文字が書けずに困っていることを感じ，声をかける場面

・困っている友達がわかってくれるように，相手の立場に立って教えること（W児）
他者理解　伝え方の工夫
V児にわかるように，V児の隣に移動して文字を書いて教えようとする場面

環境の構成

・同じ思いをもった友達が集まったグループ　共通の目的をもったグループ編成　目的の共有
小学生との交流活動ではあるが，一人一人が自分でやりたい店を選び集まったグループである。そのため，グループのメンバー一人一人が，自分達の店を完成させたいという目的をもつ姿につながった。

教師の援助

・自分達で工夫しながらつくる姿を願い，そばで見守る　見守る
困っていることはわかっていたが，二人は共に看板を完成させたいという同じ思いをもっていたことから，どのように二人で取り組んでいくのか様子を見ながら見守った。

（文責：西多由貴江）

１１月１５日（水）　「最初からつくろう！」

幼児の姿	教師の思い・考え
g児，S児，e児，W児，V児，q児，d児は，『おちばぶろやさん』をしていた。落ち葉の中に隠してある魚を水中眼鏡をつけたお客さんに探してもらう店である。遊びに来た小学１年生に，「水中メガネが小さくて痛い」と指摘され，１年生用の水中眼鏡をつくることにした。ベルトをもっと長くする，ゴムを長くするなど自分達なりに工夫し，水中眼鏡の修理を始めた。d児が以前つくった水中眼鏡のベルトからゴムを外そうとした時，勢い余ってベルトが破れ，バラバラになってしまった。 d児　「も～う。壊れた！も～～～う！」 V児　「ちゃんとやらないからでしょ」 d児　「ちゃんとやったよ」 二人は言い合いを始めた。他の幼児が二人の周りに集まってきた。 e児　「もう１回つくったら」 d児　「でも一人じゃつくれないよ」 V児　「みんなでつくればいい」 d児　「みんなでなんてつくれない！」 W児　「も～う，けんかしないで！つくれないでしょ」 幼児　「・・・・・・」 教師　「どう？１年生用の水中眼鏡，つくれそう？」 その時，S児が画用紙でつくっていた紙ベルトをd児に差し出した。 d児　「最初からつくろう！」 d児は宣言するように言った。そしてベルトを受け取り，カップを２つセロハンテープでつなげた。 e児　「(ベルトを着ける位置を指さして）ここにベルトをつけたらいいよ」 S児がカップとベルトを押さえ，d児がセロハンテープで留めて言った。 W児　「ちょっと，ベルト短くない？」 d児は，自分の頭で大きさを試してみた。 d児　「(ベルトを）ここぐらいまで（長くしたらいい)」	・d児がどのような姿を見せるのか，周りの幼児はどのようにかかわるのか，見届けたいと思い様子を見ていた ・幼児の気持ちが切り替わったらいいと思い，声をかけた。その際，d児，V児の言い合いには触れず，自分達の目的を思い出せるようにと考えた

S児は画用紙を切りベルトをつくった。そして，d児，S児はセロハンテープでつなげていき，完成させた。しかし，試しにつけてみるとセロハンテープでは弱く，ベルトが外れてしまった。 d児　「また壊れた」 g児　「ガムテープは？」 d児　「いいね」 今度はガムテープでカップとベルトをつなげた。しかし，ガムテープがカップの半分以上を覆っていたため，前が見えなかった。また，紙ベルトが短く，頭が入りにくかった。 d児，S児はガムテープを外し，もう一度，紙ベルトの長さを長くし，セロハンテープを使ってつなげ，つくり直した。 S児　「先生，つけてみて」 教師　「うん。でもどうして？」 d児　「大人ができたら，大丈夫でしょ」 教師が水中眼鏡を受け取り，つけて見せた。 教師　「先生でも，大丈夫。壊れないわ」 d児とS児はほっとした表情を見せた。	・できて嬉しいという思いで教師に声をかけてきたのではないと感じたため，S児がどうして教師につけてみるように持ってきたのか，その理由を知りたいと思い尋ねた

≪　考察　≫

課題

・1年生用の水中眼鏡をつくりたい

解決方法

・友達とアイディアを出し合って解決　試行錯誤する　アイディアを出し合う

学んでいたと思われること

・助けてくれる友達がいること（d児）　友達の存在

S児がつくった画用紙で紙ベルトを受け取った場面

・お互いにアイディアを出し合って，一緒につくりあげること　協同

友達と一緒にお互いに自分の考えを伝えたり，試したり，つくり直したりしながら1年生用の水中眼鏡をつくっていく場面

・つくったものが使えるか試して確認すること　試行　見通し

ベルトの長さが足りるか，自分の頭で試してみる場面

1年生でも痛くない水中眼鏡になっているか，教師は身に付けることができるかを，試してみる場面

環境の構成

・自分達で試行錯誤しながら目的のものをつくることができる材料　試行錯誤できる材料

幼児が自分達で使いこなすことができる材料を準備し，提示してあったことから，幼児がお互いにアイディアを出し合いながら試行錯誤してつくることができたと考える。

・自分達より体の大きい1年生と一緒に活動する場　相手意識をもつことができる場

1年生と活動する中で，1年生は自分より体が大きいので，大きい人のことを考えて店づくりをしなければいけないことに気がついた。そのことが，大きさに目を向けて活動する姿につながった。

・同じ店をつくりたい幼児が集まったグループ　共通の目的をもったグループ編成　目的の共有

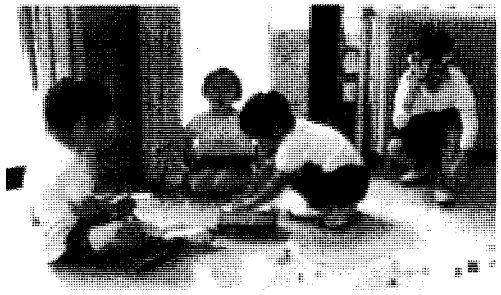
小学生との交流活動ではあるが，一人一人が自分でやりたい店を選び，できたグループである。そのため，みんなが楽しんでくれる面白い店にしたいと共通の目的をもち，自分達で試行錯誤する姿につながったと考える。

教師の援助

・目的を思い出せるように声をかける　目的を確認する

d児の困っていることに同じグループの幼児が気づき，かかわる姿が見られたが，気まずい雰囲気になっていたので，幼児に自分達は何をしようとしていたのか，思い出してほしいと考え声をかけた。そのことによってd児は気持ちを切り替え，もう一度つくろうとする姿につながった。また他の幼児もd児と共に，1年生用の水中眼鏡を完成させることができるように，アイディアを出し合いつくり始めることにつながった。

（文責：西多由貴江）



１１月１７日（木）段ボール集め②　「『もう１回持ってきてください』って書くわ」

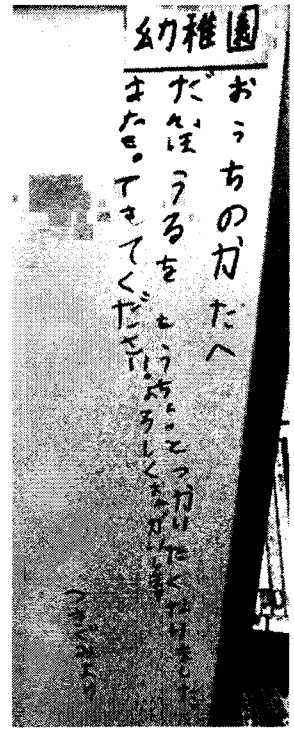
幼児の姿	教師の思い・考え
３日前に，幼児は毎日大量に届く段ボールと遊びの進み具合から，もう必要がないこととお礼をホワイトボードに書いて知らせていた。a児，Y児，M児，b児は，保育室でつくった段ボール迷路をいくつかの部品に分けてプレイルームに持ってきて，組み立て直し始めた。しかし，組み立て直すために，多くの段ボールが必要になった。	
a児　「先生，段ボール，もうなくなってきたよ」 教師　「あらっ，もうない？（ある分で）できる？」 Y児　「まだ，できんよ」 M児　「出口（の数）がいっぱいになってしまう」 教師　「どうする？」 a児　「もう１回（お家の人に）持ってきてってお願いしんなん」	・段ボール迷路がもう少しで完成なのに段ボールが少なくなってきた。そこで，もっとほしいのかある分でつくるのか考えてほしいと思い，完成したのか聞き返した
と言って，玄関に置いてあるホワイトボードを走って取りに行った。	
教師　「この前，『もういいです。ありがとうございました』って書いたよ」 a児　「知ってるよ。わたし書いたもん。だから，『もう１回持ってきてください』って書くわ」 Y児　「なんで使うのか書かんなんよ」	・ホワイトボードに書く内容や表現の仕方を考えてほしく，前回書いた内容を話題にした
とM児と教師と一緒に段ボールをつなげながらa児に話す。 教師　「どれだけほしいのかも書かんなんよ」 a児　「わかった。あと，どれくらいいる？」 b児　「もうほとんどできてない？」 M児　「でも，ここ，もうちょっとつなげんなん。（段ボールを折り曲げて）こんな壁にしてるし（たくさんいる）」 Y児　「まだ残ってるのもあるよ。『いっぱい』じゃないんじゃない？」	・全く無いわけではないことを思い出してほしい，また，完成までの見通しをもってほしいと思い，声をかけた
と話し合い，b児，M児，Y児と教師は迷路をつなげ，a児一人でホワイトボードに『おうちのかたへ　だんぼうるをもうちょっとつかいたくなりました。またもってきてください。よろしくおねがいします　つきぐみより』とお願いを書いた。	・前回もa児一人で最後まで書いていたので，文字も内容も相談されたら答えようと思い，見守った

a児　「これでいい？」 Y児　「いいんじゃない。一緒に（見える所に）置いて来よう」 と二人でホワイトボードを玄関まで持って行った。 翌日から再び段ボールがつき組の玄関に集まり始め，集まった量を見ながら段ボール迷路のつなぐ部分にしたり立体的なコースにしたりしながら考えてつくっていた。	

≪　考察　≫

課題

- **段ボール迷路をつくるための段ボールを，保護者に再び持ってきてもらいたい**



解決方法

- **残っている段ボールの量を見ながら友達と話し合い，お願いする文を書いて解決**　話し合い　文字で思いを伝える

学んでいたと思われること

- 完成までに必要な段ボールの量を考えること　状況把握　話し合い
  どれくらいの量の段ボールを持ってきてほしいか話し合う場面

- ホワイトボードにお願いを書くための内容や言葉遣いを考えること
  既知の知識の活用　表現の仕方
  ホワイトボードにお願いを書く場面

環境の構成

- ホワイトボードを使ってお願いをした経験　文字の必要性

これまでに自分達の願いや思いをホワイトボードに書き，多くの保護者に伝わり実現した経験があるので，すぐにホワイトボードを使おうという考えにつながったと考える。自分達がホワイトボードでお知らせした後，保護者や教師が書いたお知らせをよく見るようになったり，保護者に読んでもらったりしている姿も見られたことから，文字や表現の仕方への関心がさらに高まっていたように思われる。

教師の援助

・相手のことを考えて表現する文になるように声をかける

相手意識をもたせる　表現の仕方を考えさせる

自分達の思いや相手にどうしてほしいかを書くことはできると思ったが，再び持ってきてほしいとお願いする状況だということを忘れず，相手の気持ちを考えた表現にしてほしいと願い，声をかけた。

・自分達に必要な段ボールの量を考える視点を与える　考える視点を与える

場所も広くなったことで，ばらばらの部品をつなげて迷路にすることよりさらに長くすることに意識が向き，段ボールがあるから使っているように思えた。完成形の見通しをもって，どこにどれだけの段ボールが必要なのか，自分達はどのような形にしたいのかを考えるきっかけになればよいと考え，声をかけた。自分達が作業している手元から全体に目を移したことで，部品がばらばらで出口が多いことや残っている段ボールの量の把握をすることができたと考える。

（文責：和田　紀子）

本園では表現会を３学期に行い，年長児は２つの劇の中から自分でしたい劇を選び，集まったメンバーでアイディアを出し合い，ストーリーやセリフなどを創作している。今年度は「恐竜を助けるお話」「昔のお話」の２つのお話をすることになり，幼児も自分達で劇をつくることを楽しみにしていた。

１月１８日（水）　劇のストーリーづくり（恐竜を助けるお話）

Ｎ児が持ってきた冒険の本を基にした劇にしたいと２学期末から話をしていた。子ども達は２学期に遊びの中でつくった恐竜やはてなボックスを使おうと意欲的であった。

３学期になり，前日までに「恐竜と冒険家は仲間。海賊が恐竜を捕まえて連れて行く。それを助けに冒険家が冒険の旅に行く。動物達は海賊の味方」ということが決まった。

幼児の姿	教師の思い・考え
詳しいストーリーを考えるために，話し合い始めた。たくさん挙がった動物の中から，劇に登場させたい動物としてライオン，サル，カメ，イルカ，ヘビに絞り込み，この中から演じやすい動物を選ぼうという話になった。 h児　「ライオンは，冒険家が眠り薬入りのお肉をあげて追い払えばいい」 H児　「じゃあ，（その前の段階で）冒険家が出発する時にお肉渡さなきゃ」 f児　「お肉つくらなきゃ。先生，そこ（ホワイトボード）に書いておいて」 教師　「（ホワイトボードに書きながら）他につくらなきゃいけないものある？」 D児　「恐竜はもう（首と胴体が）あるから，大丈夫！」 i児　「でも，（宝箱の）鍵をつくらんなん」 f児　「先生，恐竜のひもが（肩に食い込んで）痛いから直さんなんよ」 教師　「直すものもあるんだね。（ホワイトボードに）書いておくよ。」 A児　「恐竜は？いつ出てくるん？」 恐竜役をしたいA児は，恐竜のことが気になり大きな声で言った。 教師　「本当や。肝心の恐竜が捕まったきり出てこない。どうする？」	・D児らが２学期からつくった段ボールの恐竜（下の写真）に色を塗ったことでイメージが広がりやすくなったと考える ・ホワイトボードに大まかなストーリーを書き，そこに登場人物や特徴，倒し方を書き加え，全員で共有できるようにした ・f児が忘れないためにホワイトボードを活用し始めたことに気づいてほしくて，書き残した

R児　「あとカメも（出てきていない）…どうやって倒す？」 d児　「ゴロンってひっくり返せば倒せる」 教師　「さて，ゴロンってカメをひっくり返すために，どうするか考えんなん。あと恐竜も全然出てきていません。どうするか考えて」 教師は見回しながら問いかけ，その場にしゃがんだ。口々に近くの友達と話し始め，しばらくすると D児　「わかった！恐竜の足ってすっごい太いし，恐竜役の人が足でドーンってして，それでカメがびっくりしてひっくり返ればいい！」 「いいね！」「おもしろい！」等と，友達が口々に言ったのを聞き，D児が満足そうにしていた。 教師　「どこで『ドーン』ってやるの？」 D児　「（胴体の）中で」 教師　「できる？」 D児　「難しいかも…狭いし，首のところ痛いもん」 A児　「じゃあ，足だけ（別に）つくればいい！」 「いいね！」「そうしよう！」「先生，書いておいて」等，賛同する声が聞こえた。 教師　「だんだん決まってきたね。なんとかなりそう？」 「うん！」「早くしたい！」「役も決めんなん」等，ストーリーが決まってきたことで，見通しがもてたようであった。	・一部の幼児だけで考え始めたので，全員で考えてほしいと思い，見回しながら問いかけた ・せっかくのアイディアなので，より効果的に観客に見える方法を考えてほしいと思った

≪　考察　≫

課題

・劇のストーリーを整えたい

解決方法

・友達と話し合って，ストーリーが整うために必要なことを考え解決

話し合う　見通し　目的の共有

学んでいたと思われること

・友達と一緒にアイディアを出し合うことの楽しさ　話し合うよさ　自己有用感
友達のアイディアを聞いて，自分の考えを出し合う場面

・関連づけて考えること　考えを共有する　気づき
アイディアに対して，考えを補っている場面

環境の構成

・話し合ったことを書き残すホワイトボード　見通し　可視化　情報に基づき判断する

話し合ったことが共有できるように，ホワイトボードに書き残した。言葉で書くだけでなく，絵や矢印等の記号を使ったり敵味方がわかるように色分けしたりして書くことで，話し合った内容やまだ不足していることが一目で見てわかることができたと考える。

教師の援助

・状況を知らせ，みんなで考えることができるように声をかける
状況を確認する　考えを共有させる

意欲的にアイディアを出して話す幼児がいる一方で，聞いているが話し合いに参加できない幼児や集中できなくなってきた幼児もいた。みんなで自分達の劇をつくっていることを感じてほしいと思い，みんなが話し合う雰囲気をつくったことで，これまで話していなかった幼児も一気に話し始めることができたと考える。

（文責：和田　紀子）

２月２日（木）　「ねえみんな，俺，鬼になってもいい？」

「昔のお話」は，忍者役の幼児が年長組になってできるようになったことを披露したり，自分達の国を守るために鬼をやっつけたりする場面があるお話である。

１月末から，鬼役のＬ児がインフルエンザになって園を休んでいた。そのため，鬼が出てくる場面になると話が進まなくなっていた。Ｔ児はこの事例の２日前，担任にＬ児が休んだため，話が進まなくなっていて，劇がうまくいくか心配なこと，自分が鬼になることで，劇がうまくいくのではないかということを話していた。

幼児の姿	教師の思い・考え
のびのび表現会が１週間後に迫った日の朝，Ｔ児が「先生，今日，鬼してもいい？」と尋ねてきた。Ｔ児は前日までマット忍者役で，マットで側転を披露することになっていた。 教師　「劇のことは先生一人では決められないわ」 Ｔ児　「・・・・。みんなに聞いてみる」 教師　「そうだね。でもどうして，鬼になりたくなったの？」 Ｔ児　「鬼の方が，面白そうやし」 教師　「そうなんだ。みんななんて言うかね」 Ｔ児　「・・・・わからん」 そう言って，その場を離れていった。	・Ｔ児が役を変わりたいと言ってきて驚いたと同時に，どうしたらいいか悩んだ。そこで，劇づくりをしてきたメンバーはどのように考えるか，聞くことが一番だと考えた
劇の練習を始めようと，みんなが集まった時，Ｔ児が教師に「聞いてもいい？」と言ってきたので，みんなに話すよう促した。 Ｔ児　「ねえみんな，俺，鬼してもいい？」 みんな　「・・・・・・・・・・」 周りの幼児は，Ｔ児の言葉を聞き，今頃何を言い出すんだというような表情になった。 Ｔ児　「ねえみんな，俺，鬼になってもいい？」 その言葉を聞き，「ダメ」「いいよ」と言い始めた。鬼役のＣ児とｕ児は「いいよ」と言っていた。 Ｖ児　「ダメ！もうダメ！」 Ｋ児　「ダメや。だって，そんな急に変わったらダメや」 ｍ児　「いいよ！」 Ｉ児　「ダメや！だって鬼になったら，鬼と戦う忍者も一人増やさなくちゃいけなくなる」 Ｋ児　「そうや。マット忍者も少なくなるし」	・幼児はストーリーづくりや役割決めの時に，自分達が悩んだり，工夫したりしてきたことをもとに，話し合っていることがわかった

P児　「(鬼とたたかう) 忍者は，今も（鬼が三人で忍者が二人で）人数違うからいいよ」 I児　「でも，P児ちゃんもいるから3対3で（たたかうで）しよう。鬼が増えたら，三人と四人になるよ」 P児　「最初，3対2でたたかっとるから，同じじゃないよ。だから，できるよ」 I児はP児の言葉に納得した様子だった。 教師　「鬼をやっつける忍者は，どう思う？」 V児　「ダメ！」 n児　「(人数) 違ってもできると思う。一人と二人でたたかうことにしたらできるよ」 K児　「でも～，それに（今から）セリフとか覚えられる？」 T児　「大丈夫！セリフとか動きとかは覚えられる！」 x児　「え～，マット忍者少なくなるよ」 t児　「(マット忍者) T児おらんでも大丈夫や」 m児　「俺らで，できるって」 教師　「マット忍者（m児，t児，x児）は，T児君がいなくても，できそうなんだ」 マット忍者　「うん」 P児　「私も，鬼が増えてもできる」 V児　「ダメ！」 P児　「(V児君) セリフとか，動きとか，変わらんよ」 V児　「う～」 教師　「V児君は，今から変わるのが心配なんだね」 V児　「うん」 教師　「(同じ役の) n児君。V児君は心配なんだって。n児君はどう思う？」 n児　「ぼく～，(変わっても) できると思う」 V児　「・・・・・」 教師　「T児君，みんないろいろ考えてくれたね」 T児　「俺，鬼がんばるし，やってもいい？」 多くの幼児は「いいよ」と答え，「セリフちゃんと覚えてね」「動きも忘れないでね」などとT児に声をかけた。しかし，V児は「ダメ」と言った。	・鬼が出てくる場面の幼児らはどのように考えているのか知りたいと思い，声をかけた ・これまで，T児と一緒にやってきたメンバーはT児がいなくてもできると言ったことに驚いた。頑張ろうとする気持ちを応援したいと思った ・V児はなかなかセリフや舞台の上での動きが覚えられず，苦労してきた幼児である。そのため心配していることがわかった。V児の思いをまわりの幼児にわかってもらいたいと考えた ・T児の鬼になりたいという気持ちを受け止め，考えてくれる友達がいることをわかってほしいと思った

P児　「V児，たたかう所，P児が二人とたたかうから大丈夫や」 n児　「n児も，変わってもできるよ」 教師　「V児君，どう？」 V児　「う～ん。・・・・いいよ。やってみる」 この日からT児は鬼役になった。	

≪　考察　≫

課題

・劇を成功させたい

解決方法

・同じ劇グループの友達と劇を成功させるために考えを伝え合い，話し合うことで解決する
話し合う

学んでいたと思われること

・自分とは異なる考えや思いの友達がいること　他者理解

話し合いの中で，「いいよ」「ダメ」と，T児の思いに対して異なる考えをもっている幼児が話し合う場面

・友達を納得させるために自分の考えを伝え，説得すること　説得すること

劇を成功させたい思いをもつ幼児らが，自分の置かれている状況に応じて考えを伝え合いながら，話し合いを進める中で，友達を説得していく場面

・自分の気持ちに折り合いをつけ，新しい考えをもつこと　折り合い　新しい考えをもつ

初めは「ダメ」と言っていた幼児が，友達の話を聞いて納得したり，友達の言っているようにやったらできるかもしれないと，自分の気持ちや考えを変えていったりした場面

環境の構成

・自分達で話し合いながら劇づくりをしている状況　話し合いの場の設定

この日に至るまで，グループの友達と話し合いを積み重ねながら，ストーリーを考えたり，登場人物を考えたりしてきた。そして，数日前から幼児はこれで本番まで頑張ろうと思う役になり練習を始めていたが，鬼役のL児がインフルエンザになったことで，劇が進まなくなってしまった。そのことから，T児は自分が役を変わればうまくいくのではないかと考えグループの友達に課題を投げかけた。そこで，グループみんなで話し合いの場を設け，どうするかを話し合う姿につながった。

教師の援助

・幼児一人一人の思いや考えが伝え合えるように必要に応じて仲立ちをする

代弁する　整理する　確認する

自分の思いや考えを言葉でなかなか表現することができない幼児が思いや考えを言葉で表現することができるように，話を聞いている幼児が友達の思いや考えを理解することができるようにと思い，必要に応じて言葉を投げかけた。そのことで，幼児はお互いの思いや考えを知り，話し合うことができたと考える。しかし，T児の思いを他児に伝えられなかった点は反省として残る。

（文責：西多由貴江）